



Title	異文化間コミュニケーションにおけるトライマーカーの使用 : タンデム学習の会話を中心に
Author(s)	蔡, 真彦
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2021, 55, p. 55-77
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/91492">https://hdl.handle.net/11094/91492</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 異文化間コミュニケーションにおける トライマーカーの使用

—タンDEM学習の会話を中心に—

蔡 真 彦

キーワード：言及／上昇イントネーション／認識的ステータス／  
異文化間コミュニケーション

## 1. はじめに

日常会話において、人々はよく人・場所などについて言及（refer）する。しかし、受け手が言及された物事について、必ずしも知っているとは限らない。受け手が言及された物事について知っているかどうかというコミュニケーション上の問題を解決するために、以下の事例1のように上昇イントネーションを使用する事例が観察される。

事例1 【嵐にしゃがれ】 2018年7月収録

チェン：中国語母語話者 りか：日本語母語話者

1	チェン	なんかわたしあんまり日本の	(0.3)	バレ-ん：：パレエティー番組	(0.3)
		見ないけど、			
→	2	。あの。	(0.6)	嵐にしゃがれ？ =	
	3	りか	=うんうん。		
	4		(0.5)		
	5	チェン	だけ、		
	6	りか	へ [：：]		
	7	チェン	[見てる。		

2行目の矢印で示した発話において、チェンは「嵐にしやがれ」という番組名の直後に上昇イントネーションを加え、受け手がそれについて知っているかどうかを尋ねている。

Sacks & Schegloff (1979) は、「固有名詞 + 上昇イントネーション + 短いポーズ」の形式を使用し、言及された物事に対する相手の認識を確認することについて論じ、そのような形式を「トライマーカー (try-marker)」と呼んでいる。

一方、異文化間コミュニケーションにおいては、話し手も言語能力の制限によって、自身の言及法に疑問を感じる可能性が存在する。受け手が知っているかどうかというコミュニケーション上の問題の他に、話し手自身の言及法が正しいかどうかという言語能力上の問題が生じる。そのとき、話し手が言語能力上の問題を解決することに志向することもある。

本稿は、会話分析の手法 (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974) を用い、異文化間コミュニケーションの一種である「タンデム学習 (tandem learning)」(3.1 節を参照) の会話の録音ファイルを研究のデータとする。タンデム学習の場面におけるトライマーカーの使用に注目し、その構造と返答について分析を行い、日本語母語話者と日本語非母語話者のトライマーカーの使用の違いについて、そして、会話参加者がいかに言語使用上の問題を解決することに志向することを表すかについて考察する。

本稿の構成として、まず2節で本稿に関わる先行研究を挙げつつ、問題のありかについて述べる。次に、3節でタンデム学習に関する情報と会話参加者の情報を提示する。4節で分析の枠組みを整理し、5節でデータを分析し、6節で分析結果を踏まえて考察し、最後に7節でまとめと今後の課題について述べる。

## 2. 先行研究と問題のありか

言及に関する研究は、前述の Sacks & Schegloff (1979) の他、Hayashi

(2005)、串田 (2008)、Heritage (2007) が挙げられる。Sacks & Schegloff (1979) は、言及における「受け手に合わせたデザイン (recipient design)」の優先性と「最短化 (minimization)」の優先性について論じ、トライマーカーという概念を提唱している。受け手に合わせたデザインの優先性とは受け手が認識できると思われる言及法を使用することであり、最短化の優先性とは1つの対象に言及する際に1つの記述を用いればよいということである。Hayashi (2005) は日本語会話において後置的な要素 (助詞) を利用し、言及という副次的な活動から主要な活動に移る現象について論じている。串田 (2008) は、日本語会話におけるトライマーカーの他に、言語的リソースを利用し受け手の認識状況を確認する実践についても分析している。また、串田 (2008) は、認識状況を確認するときにパラ言語的リソース (すなわちトライマーカー) を使用することと、言語的リソースを使用することが、会話における進行性の問題と認識の問題への異なる対処だと述べている。パラ言語的リソースの使用は、進行性の問題と認識の問題を同時に対処するのに対し、言語的リソースの使用は、会話の進行性を遅らせ、認識の問題への対処を優先することを意味する。そして、Heritage (2007) は言及に関する研究において、言及対象に対する理解を示す方法について論じている。Heritage (2007) は Sacks (1992) が提唱した用語を借用し、受け手が言及対象に対する理解を示す方法を「主張 (claim)」及び「立証 (demonstration)」の2種に分けている。理解の立証とは、言及対象をほかの言及法でもう一度言い換えることであり、その言い換え方が間違っていれば逆に理解していないことが証明される。一方、理解の主張の典型的な例として、言葉の繰り返しや、「うん」・「はい」のような発話があげられる。

異文化間コミュニケーションにおける言及について、許 (2012) と Sert (2013) が挙げられる。許 (2012) は短期留学で来日した留学生と日本人学生間の自由会話に注目し、「名詞+上昇イントネーション」の形式で行われた確認要求について分析している。Sert (2013) は言語教室において教師が「No idea?」や「You don't know?」などで学生の認識状況を確認する実践に

ついて論じ、会話管理の側面と教授法の側面の研究価値について説明している。

多くの先行研究においては、トライマーカーの使用を通して受け手の認識状況を確認することに志向している場面に限定している。本稿の取り扱うデータにおいては、話し手が言及する物事に対してよく知っているが、言語能力によって適切で正しい言及法を使用することができない可能性が存在し、トライマーカーの使用を通して言語知識の学習に志向することが観察される。そのような使用の実態について記述する必要があると考えられる。また、トライマーカーに対する受け手の返答とその続きの連鎖について分析・考察する余地があると考えられる。

本稿は以下の3つのリサーチクエスチョンを中心として、対面式タンデム学習におけるトライマーカーの使用について分析・考察を行う。

対面式タンデム学習の場面において：

- (1) トライマーカーの使用は、会話の連鎖のどの位置に見られるか。また、それに対する返答はどうなっているか。
- (2) 日本語母語話者と日本語非母語話者のトライマーカーの使用に違いがあるか。もしあれば、それはどのような違いなのか。
- (3) 参加者たちはトライマーカーの使用を通して、いかに言語使用上の問題への志向を示しているか。

### 3. データの概要

#### 3.1 タンデム学習について

本稿で着目されるタンデム学習とは A 言語が得意で B 言語を学びたい人と、B 言語が得意で A 言語を学びたい人がペアを組み、互いの言語学習を助け合う活動である。タンデム学習の時間において、参加者たちは自身の言語学習のニーズに合わせて、学習の方式、頻度、リソースを自身で選択し、学

習計画を立て、学習活動を進めていく。

Little & Brammerts (1996) は、タンデム学習に「互恵性 (reciprocity)」と「学習者オートノミー (learner autonomy)」という2つの原則があると述べている。「互恵性」とは、二人の参加者の関係を指す。このような関係において、二人は各々の目標を達成するために、また自身の能力を向上させるために互いに助け合う。互恵性を保つために、二人で学習のペアを組み、学習の時間を半分ずつ分けることが重要である。また、「学習者オートノミー」とは、個人の学習をコントロールする能力である。学習者が学習の時間、内容、方法、そしてパートナーにどのように助けてほしいかを自身で決める。

### 3.2 会話参加者情報

本研究で取り扱うデータは、2018年6月から2019年2月までである日本の大学にて行われた対面式タンデム学習（以下、タンデム学習）の録音ファイルおよび文字化の資料である。合計5ペアのタンデム学習参加者に調査協力していただいたが、本稿ではペア内の二人ともトライマーカーの使用が多い2ペアのみ取り上げる<sup>1)</sup>。また、参加者たちはそれぞれの言語学習状況によって、タンデム学習で使用する媒介言語（日本語、英語、中国語など）を決めるが、本稿では主に日本語を媒介言語として用いる会話を分析対象とする。

データの詳細情報は以下の表1である。ペア③の松本が英語を学習する時間において英語で会話をするため、本稿では取り扱わない。匿名性を守るために、人名はすべて仮名で、事例に現れた地名などの固有名詞はすべて「○ ○」あるいは仮名にしている。

表1 会話参加者情報

ペア番号	②		③	
参加者	チェン	りか	テサ	松本
年齢	20代前半	20代前半	30代前半	30代前半
性別	女性	女性	女性	女性
母語	中国語	日本語	ギリシャ語	日本語
学習言語	日本語	中国語	日本語	英語
学習言語レベル	上級 (N1 合格、 当時日本に 2 年 間滞在)	初級	上級 (N1 合格、 当時日本に 1 年 間滞在)	上級 (英語圏の 国での留学経験 あり)
使用する媒介言語	日本語	日本語	日本語	英語
主な学習活動	普段出会った日本 語の問題に関 する質問。日常 会話。	中国語の教科書 を使って発音と 語彙の学習。簡 単な作文。日常 会話。	日常会話。	日常会話。
収録回数	2回		5回	
データの長さ	1時間8分2秒		5時間15分44秒	

筆者はこのタンデム学習プロジェクトの参加者募集と運営に従事している。参加者募集は毎学期の第1週目から始まり、募集対象は大学関係者全員のため、ペアを組んだ二人は面識がないことが多い。すべての参加者は正式にタンデム学習を始める前に、タンデム学習プロジェクトのコーディネーターによるガイダンスに参加し、互いの言語学習状況について話し合い、タンデム学習の進め方や学習活動の例などに関する説明を受ける。

また、学期の中間にワークショップやパーティーなどのイベントがあり、筆者はこれらのイベントの後で参加者たちに調査協力を依頼した。調査は参加者たちが3回以上学習活動を行ってから開始しているため、関係が築かれ、学習活動の変化も少ない。参加者間の関係と学習活動の変化が分析に及ぼす影響を最小限にすることができると考えられる。また、収録したデータは参加者の個性や言語能力を評価するものではなく、会話の構造を分析するためのものだと、収録する前に協力者に伝えておいた。

#### 4. 分析の枠組み

本研究は、主に Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) が提唱した「順番交替のシステム (turn-taking system)」の理論及び Schegloff, Jefferson & Sacks (1977) が提唱した「修復 (repair)」の理論に基づき、会話分析の手法をもって分析を行う。録音の文字化の規則は高木・細田・森田 (2016) に基づく (文字化規則は付表を参照)。

また、なにかを言及する際に、受け手の認識状況が知っているまたは知らないかは会話の進展に大きな影響を与える。一方、異文化間コミュニケーションにおいて話者の言語能力も言及法に影響を与え、最終的に受け手の認識状況に影響を及ぼすことになる。そのため、会話参加者の言語に関する知識量、及び言及される事物に関する知識量について分析する必要がある。会話参加者の知識量について、Heritage (2012a,b) が提唱した「認識的ステータス (epistemic status)」という概念を用いる。

以下、本研究で使用する会話分析及び認識的ステータスの概念について簡単に説明する。

- ①ターンの構成単位 (turn constructional unit, TCU) : 発話がどこでどのような形で終わるかが受け手が予測できる構造を持つ単位である。予測の手がかりとして、文法の他に視線、プロソディーなどが挙げられる。
- ②優先組織 (preference organization) : 会話において複数の優先性が存在する。典型的な例として、隣接ペアにおいて「依頼」に対する「受諾」は優先的で、逆に「断り」は非優先的であることがあげられる。このように第1部分の発話による行動と同調して発話することを優先組織と言う。会話において受け手が非優先的な反応を示せば、優先的な応答を得るため話し手は発話の極性を反転させることがある (5.1 節の事例 2 【近松門左衛門】を参照)。
- ③後続連鎖 (post-expansion) : 隣接ペアの第2部分のあとの連鎖である。い

ままでの連鎖の区切りとなるものと、さらに連鎖を展開するものがある。

- ④修復：会話における発話・聞き取り・理解に関する問題を解決するための活動である。それらの問題源を「トラブル源 (trouble source)」と呼ぶ。
- ⑤認識的ステータス：会話参加者のある特定の情報に関する知識量である。知識量のより多い状態を「(K+)」、知識量のより少ない状態を「(K-)」と呼ぶ。

## 5. 分析

5節では、連鎖の異なる位置で使用されるトライマーカーとその返答について分析する。5.1節で新しい話題を導入する部分で使用される事例、5.2節で質問に対する返答（隣接ペアの第2部分）に見られる事例、5.3節で後続連鎖におけるトライマーカーについて分析を行う。

### 5.1 話題導入部分に見られるトライマーカー

本節では、話題導入部分に見られるトライマーカーについて分析する。この部分で使用されるトライマーカーの事例は以下の日本語母語話者による事例2のほか、1節で挙げた日本語非母語話者による事例1もあるが、紙幅が限られているため、事例1の分析を省略する。

事例2において、松本とテサは文楽に関するパンフレットを見ながら話している。文楽の『曾根崎心中』に関する話題で、松本は大阪で「曾根崎」というところがあったという話をしていた。近松門左衛門はその作者である。以下、トライマーカーを使用している発話は「→」で示す。

## 事例2 【近松門左衛門】 2018年12月収録

テサ：ギリシャ語母語話者 松本：日本語母語話者

1	松本	曾根崎っていうとこ。
→ 2	松本	そこ-そののなんかなんか(.) そうそう (0.6) えっとなんだ近松門左衛門?
3		(1.0)
4	松本	聞くなって¥か¥、hhh。
5		¥私 [に聞くなって感じだよね¥]。
6	テサ	[んえ? .hh.hh.hh ]
7	松本	近松門左衛門だけ書いた [のっ] てhh [hh ]
8	テサ	[.hh ] [あ:::] hh
9	テサ	¥探してみま [す¥]。
10	松本	[おん] =
11		=ちくなよって感じだよね¥私にね¥。 (松本は近松門左衛門について紹介し始める。))

事例2において、松本は「近松門左衛門」を話題に導入するときにはトライマーカーを使用し、受け手のテサの認識的ステータスを確認している。しかし、その後テサの返答がなく、会話に1秒の間合いが生じている。松本は、その間合いをテサの否定的な反応だととらえ、4行目で「聞くなって¥か¥」と笑いを交えた形と「って」の引用表現で、受け手の声を借りて「自分は聞く行動をすべきではない」と言語行為に対して否定的な評価を行っている。この事例において、2行目の質問に対し非優先的な返答（否定的な返答）がなされたため、受け手のテサから優先的な返答（肯定的な返答）を得るために、松本は4行目で質問をすべきではないと自身の発話の極性を反転するストラテジーを用いている。続いて、テサは6行目でトラブル源を限定しない他者修復を開始し、松本が7行目でさらに説明している。テサは8行目ではじめて「あ:::」と状態変化のトークン（change-of-state token）（Heritage, 1984）で自身の認識的ステータスが（K-）から（K+）に変わったことを示し、9行目で「¥探してみます¥」と笑いながら産出し、松本が文楽の情報を提供する行為と同調する反応を示している。

この事例において松本がトライマーカーを使用し「近松門左衛門」を話題に導入した後に、受け手のテサが(K+)の返答を示さなかったため、3行目から11行目まで「近松門左衛門」に関する話題が展開されていないことが観察される。

## 5.2 質問に対する返答に見られるトライマーカー

本節では、質問に対する返答（隣接ペアの第2部分）に見られるトライマーカーの使用について、日本語母語話者によるトライマーカー（事例3）と非母語話者によるトライマーカー（事例4）を分析する。

事例3は、りかが好きなアイドルについて中国語の文章を書き、チェンがそれを訂正する活動で行われた会話である。事例3の冒頭は、訂正が終わった後、チェンは日本語でどのように自分のアイドルを友達に紹介するかについてりかに聞き始めるところである。その後、りかは、自分のアイドルを紹介するのが恥ずかしいから言わないと答え、チェンがさらになぜ恥ずかしいかと質問する。

### 事例3 【オタク】 2018年7月収録

チェン：中国語母語話者    りか：日本語母語話者

- |      |     |                          |
|------|-----|--------------------------|
| 1    | チェン | じゃ友達に自分のアイドル紹介するとき、      |
| 2    | りか  | なんというのか、                 |
| 3    | チェン | どう [いう、うん、どういう]          |
| 4    | りか  | [ は-はずかしくて] あんま言わないんだよね= |
| 5    |     | =ただhhhhh                 |
| 6    | チェン | ええ>はずかしく、なん [↑で]         |
| 7    | りか  | [ちょ] っとはずかしい。            |
| 8    | チェン | うんうん。                    |
| 9    | りか  | なんか：：                    |
| 10   | チェン | あそう。                     |
| → 11 | りか  | うん、おたく？ (0.4) って感じがする。   |
| 12   |     | (1.4)                    |

- 13 チェン おたくの感じ？  
 14 りか うん。あのう、別 [の ]  
 15 チェン [別に] アニメとか  
 16 りか ではないけど、うん、なんか (.) ね、すごい好きな人をおたくっていうの。  
 17 (1.4)  
 18 りか 日本、日本だと、アニメに限らず、  
 19 私もそこに入るんで：たぶん、知らないけど、  
 20 >なんかちょっとなんか< (0.3) 隠してる普段は (1.0) hhhh  
 21 チェン あっ、そうなんだ。  
 22 りか 普段かくしてる。

事例3において、りかは11行目で「おたく」についてトライマーカーを使用し、チェンの認識的ステータスを確認している。トライマーカーの使用は11行目の「おたく？ (0.4) って感じがする」というTCUの途中に組み込まれている。また、11行目のりかの発話は6行目のチェンの質問に対する回答でもある。その後、13行目においてチェンは「おたくの感じ？」と直前のりかの発話の一部を繰り返して、上昇イントネーションを加え、トラブル源を限定するタイプの他者修復を開始する。14行目で、りかは自己修復を開始し、「おたくの感じ」について説明し始める。チェンは15行目で「別にアニメとか」と自身の考えを述べ、16行目でりかは「ではないけど」と順番の冒頭を15行目のチェンの発話と文法的に繋がっている形で構成し、「おたく」の意味について説明する。さらに18行目で「日本、日本だと」と自身の説明の成立する範囲を限定し、19、20行目で「たぶん」「知らないけど」「なんか」「ちょっと」などのことばで「おたく」の意味に対する断言を避けている。20行目の最後に、りかは「かくしてる普段は」と、日本語で自分のアイドルを友達に紹介する行為に関する語用論的知識を説明する連鎖に戻る。

次に、日本語非母語話者によるトライマーカーの事例4を挙げたい。事例4の直前にテサは最近あるデパートのドイツのクリスマスマーケットでワインが売られていると話している。

## 事例4 【ワイン】 2018年12月に収録

テサ：ギリシャ語母語話者 松本：日本語母語話者

- |     |    |                              |
|-----|----|------------------------------|
| 1   | 松本 | ワイン好き？                       |
| 2   | テサ | ん？                           |
| 3   | 松本 | ワイン好きですか？                    |
| 4   | テサ | ん：：(1.0) 甘いほうが好きなんですけど (0.5) |
| → 5 |    | なんか (0.9) dry-ドライ？           |
| 6   | 松本 | うんうんうん                       |
| 7   | テサ | いい-言いますか。                    |
| 8   | 松本 | うんうん                         |
| 9   | テサ | 日本語でも hh                     |
| 10  | 松本 | うんうん                         |
| 11  | テサ | そう (.) うん (.) それはあ↑んまり       |
| 12  | 松本 | あ (.) 好きじゃないんだ               |

事例4において、テサは4行目で、3行目の松本の質問に回答している。テサは5行目でまず「なんか」と言い淀み、その後「dry - ドライ？」の部分で「dry」という英語の発音から「ドライ」という日本語の発音にコードスイッチングし、「ドライ」の直後にトライマーカーを使用している。

続いて、松本は6行目で一度「うんうんうん」を産出し、理解を主張しているにもかかわらず、テサは7行目で「言いますか」と発話し、自身の言語使用が正しいかどうかについて松本に確認要求する。8行目で松本は「うんうん」と肯定的に返答しているが、9行目でテサが「日本語でも」と、7行目の発話と意味的に繋がる形で発話し、さらに確認要求の範囲は「日本語」であることを示している。この事例において、トライマーカーで言及された「ドライ」という味覚に対し、受け手の日本語母語話者が「うん」で(K+)の認識的ステータスを示したにもかかわらず、話し手の非母語話者はさらに言語知識に関する確認要求を行っていることがうかがえる。

事例4の分析を通して、トライマーカーを使用するTCUにポーズ・言い淀み・言葉探し・コードスイッチングなどの現象がみられる場合、受け手の

母語話者が (K+) の認識的ステータスを示しても、非母語話者がさらに言語使用の知識について確認要求することが観察される。

### 5.3 後続連鎖におけるトライマーカー

4 節で後続連鎖について触れたが、いままでの連鎖を区切る後続連鎖においてトライマーカーの使用は観察されず、前の連鎖をさらに展開する後続連鎖において観察された。本節では、前の連鎖をさらに展開する後続連鎖に見られるトライマーカーの使用について分析する。このような連鎖の位置でトライマーカーを使用するのは日本語母語話者のみで観察されたため、日本語母語話者による事例5のみを取り上げる。

事例5は事例3の少し前の会話である。りかは好きなアイドルの紹介文を中国語で書いて、チェンに訂正してもらっているところである。訂正している文は「他们在2014年出道了（彼らは2014年にデビューした）」である。この会話の直前に、チェンはりかになぜ「デビュー」に当たる中国語「出道<sup>chū dào</sup>」を知っているかと聞き、りかは調べたと答えた。中国語で発音している部分は「\*」で囲んでいる。

#### 事例5 【デビュー】 2018年7月収録

チェン：中国語母語話者    りか：日本語母語話者

1	チェン	わたし (1.1) げ- 芸人さんのこととか (0.6) アイドルにあまり (0.5) わからない (0.2) けど、
2		この*出道 <sup>chū dào</sup> * (0.9) *出道 <sup>chū dào</sup> * このこと ¥ば¥ (1.0) 実はいつもえゝに-に- どうい-d-d- どんな意味 (0.5) て思ってる。
3		(0.6)
4	りか	なんだろ
5		(0.7)
6	チェン	*出 <sup>chū</sup> -出道 <sup>chū dào</sup> *
7		(1.2)
8	りか	なんていう [だろ]。

- 9 チェン [ み-] み [ちに出る]。  
 10 りか [°たしかに°]。  
 11 (0.4)  
 12 りか (.....)  
 13 (1.1)  
 14 チェン デヰビューヰ  
 15 (0.8)  
 16 りか その (.) 芸能の道 [に出る ] (.) っていうことだと思う。  
 17 チェン [うんうん]  
 18 チェン うんうん。  
 19 (1.0)  
 20 チェン °たぶん°。  
 21 (1.2)  
 22 チェン じゃ次に。  
 23 (0.3)  
 → 24 りか おおやけに？しかも。  
 25 (0.7)  
 26 チェン うん？ =  
 27 りか =おおやけに？  
 28 チェン おお [やけ？]  
 → 29 りか [会社 ] (.) 会社からの (0.7) こう (.) 応援？  
 30 (0.5)  
 31 りか みたいなのを受けて (0.4) 道に入れる。  
 32 (0.3)  
 33 りか [ていうこ] とだと思う hh [hh  
 34 チェン [ん↑ん：:] [ん↑ん：：  
 35 (0.9)  
 36 チェン ん：：そうかもしれない。  
 37 チェン \*°<sup>chūdao</sup>出道°\*  
 ((二人は次の文を確認していく。))

事例5において、チェンとりかは1行目から20行目にかけてなぜ中国語の「出道」は「デビュー」の意味を表せるのかについて話し合っている。チェ

んはまず9行目で一回「道に出る」と解釈を試み、次にりかが16行目で「芸能の道に出る（.）ってということだと思う」と自身の見解を述べている。りかの見解に対しチェンは18行目で肯定し、20行目で小声で「たぶん」と肯定の程度を下げている。22行目でチェンは次の文の訂正に入ろうとしていたが、りかは24行目でまずは「おおやけに」にトライマーカーを使用し、その直後に「しかも」と付け加えることで22行目のチェンの話題転換の発話を無効化し、前の話題に遡っている。24行目のトライマーカーを含む発話は、さらに中国語の「出道」の意味に関する交渉の連鎖を拡張する後続連鎖と考えられる。

続きの26行目において、チェンはトラブル源を特定しない「うん？」で他者修復を開始し、りかは27行目で「おおやけに？」を繰り返すが、「おおやけに」について追って説明していない。28行目でチェンは「おおやけ？」とトラブル源を特定する他者修復を開始し、29行目でりかは「おおやけ」の意味と「デビュー」を結びつけて説明し始める。そこで二人の立場が動的に変換し、りかは（中国語の）学習者から協力者になり、チェンは協力者から（日本語の）学習者になっている。

29行目の最後において、りかは再び「応援」にトライマーカーを使用している。このトライマーカーの使用はTCUの途中にあり、その後に短いポーズを置くことで、チェンが「応援」に対する反応を示すことができる空間を作っている。その後31行目の始めに「みたいな」と発話し、29行目の発話と結びつく形でTCUを完成させる。さらに、33行目で「ていうことだと思う」との表現を使用し、中国語の「出道」の意味について断言することを避け、自身を中国語の学習者として位置付けている。36行目でチェンも「そうかもしれない」とりかの解釈を完全に肯定せずに、中国語の「出道」の意味について結論に至らないまま連鎖が終わっている。

事例5において、前の連鎖をさらに展開する後続連鎖にてトライマーカーを使用することが観察される（24行目）ほか、5.2節の事例4と同様に質問に対する返答にてトライマーカーが使用されている（29行目）。トライマー

カーを使用したやりとりの中で二人の間の学習者と協力者の立場は動的に変化していることが見られる。

## 6. まとめと考察

本節では、5節の分析をまとめ、それを踏まえて考察を行う。5節で連鎖の異なる位置で見られるトライマーカーの使用とその返答について分析した。その結果は以下のようにまとめられる。

<1> トライマーカーは、会話の話題導入部分・質問に対する返答の部分・後続連鎖など連鎖の様々な位置において使用される。また、TCUの途中でトライマーカーを使用することで、受け手を自身の順番に「引き込む」(岩崎, 2008)<sup>2)</sup> ことができる。

<2> 話し手はトライマーカーに対する無返答を、受け手の認識的ステータスが(K-) であるとして捉えている。

<3> 日本語非母語話者によるトライマーカーに対し、母語話者が「はい」や「うん」などで理解を示した後は、会話は元の話題に戻らず、非母語話者は日本語の知識に関して確認要求することがある。参加者はトライマーカーの使用を通し、言及内容に対する受け手の認識状況を確認するほか、言及法が文法的に正しいかどうかについて受け手に確認してもらうことが観察される。

以上の分析のまとめを踏まえ、タンデム学習という場面を考慮に入れながら、ここでリサーチクエスチョンを再掲し、考察を行う。

対面式タンデム学習の場面において：

(1) トライマーカーの使用は、会話の連鎖のどの位置に見られるか。また、それに対する返答はどうなっているか。

前述のまとめで詳しく述べたように、トライマーカーは、会話の話題導入部分・質問に対する返答の部分・後続連鎖など連鎖の様々な位置において使

用される。トライマーカーに対する無返答は有標だと話し手に捉えられている点から、トライマーカーを含む発話は、「質問」に近い隣接ペアの第1部分の性質を持ち、第2部分の「返答」を求めていると考えられる<sup>3)</sup>。

本稿で取り上げた事例において、トライマーカーに対する受け手の返答は受け手の認識的ステータスから見て「知っている」の(K+)と「知らない」の(K-)の2種に分けられる。

一般的に、会話の進行性を保つために、トライマーカーの使用を通して受け手の認識的ステータスを確認する際に受け手の認識的ステータスが(K+)であれば、話し手は認識状況を確認する連鎖を終え、本題連鎖に戻ると考えられる。また、会話の間主観性を保つために、受け手の認識的ステータスが(K-)であれば、話し手は言及法を変えることや説明することになる。しかし、タンデム学習において、受け手の認識的ステータスが(K+)であることを「うん」などで主張しても、非母語話者がさらに言語知識について質問することがある。

(2)日本語母語話者と日本語非母語話者のトライマーカーの使用の違いがあるか。もしあれば、それはどのような違いなのか。

連鎖のどの位置で使用するかに差は見られないが、日本語非母語話者はトライマーカーの使用を通して、言及対象に対する受け手の認識状況を確認するほか、言語使用の知識への志向を示すことができる。

しかし、言語知識への志向を示すことができるのは、「日本語非母語話者」ではなく、「言語学習者」と言ったほうがよいだろう。タンデム学習の参加者たちは、タンデム学習の活動の最初から最後まで「言語学習者」であるアイデンティティを表しているわけではなく、友人として最近の出来事の報告をするなど日常会話をすることも多い。また、互いの言語学習に協力し合う関係にあるため、ある特定の言語の「母語話者」あるいは「非母語話者」というカテゴリーが弱められている。

それでは、「言語学習者」と「言語学習の協力者」によるトライマーカー

の使用にどのように違いがあるのか。Mondada (2013) はフランス語のガイド付きツアーのデータを分析対象とし、「成員カテゴリー (membership categorization)」・「言語行動」・「認識的権威 (epistemic authority)」の関係について論じ、「ガイド」の役割を持つ人は、「説明・紹介」という言語行動を行い、認識的権威を主張する権利と義務があると述べている。言語学習の場合においても、目標言語の「上達者」(母語話者)と「未熟者」(非母語話者)というカテゴリーが存在している。そのカテゴリーはタンデム学習において「言語学習の協力者」と「言語学習者」に切換えられ、言語学習における個人の主体性、自律性が強調される。タンデム学習のパートナーと日常会話をしている中で、積極的に目標言語を使用し、知らない言語知識を獲得することを目指す「言語学習者」は、トライマーカーを使用することで受け手に言語知識に関する確認要求ができる。一方、「言語学習の協力者」もトライマーカーの使用で受け手の認識状況を確認し、受け手に合わせて言及法をデザインすることができる。

(3)参加者たちはいかにトライマーカーの使用を通して、言語使用上の問題への志向を示しているか。

会話参加者が言語知識への志向を明確に示すことは、パートナーとの進行中の話題から一時的に離れることを意味する。トライマーカーの受け手は認識的ステータスが(K+)であれば、会話の進行性を保つために、「うん」や「はい」などで短く返答する傾向がある。しかし、タンデム学習において参加者たちは互いの言語を学び合う活動に参加しており、進行中の話題から一時的に逸脱し、言語学習への志向を示すのがこの場では適切であると考えられる。トライマーカーの使用を通して受け手に即座に返答してもらい、会話の進行性を遅らせることを最小限にし、日常会話を進めながら言語知識に対する確認を行うことが可能である。そのようなトライマーカーの使用は言語学習者の場合に多く見られる。

だが、受け手は、言語学習者がトライマーカーの使用を通して言語使用上

の問題への志向しているのだと、最初からは捉えていないことも観察された。少し間違っても聞き取ればいいのか、あるいは間違いを教えてあげないといけないのかというジレンマに学習協力者は直面している。それと同時に、パートナーの「うん」は聞き取れたという意味なのか、それとも言い方が正確だと判断してくれたのかというジレンマに学習者は直面している。トライマーカーのみを通して言語使用上の問題への志向を示すのは、暗示的であり、受け手に認識してもらえない可能性があると考えられる。

5節にて分析した、トライマーカーの使用後に言語知識に関する会話が明確に展開された事例を振り返れば、言い淀み・言葉探し・コードスイッチングなどがトライマーカーとともに、言語学習への志向の標識として使用されていると考えられる。言い淀み・言葉探し・コードスイッチングなどを通して、発話の困難を示しながら、トライマーカーで受け手を自身の順番に引き込み、一時的に日常会話から離れ、言語知識に関する会話を進めることができると考えられる。

一方、言語学習の協力者がトライマーカーを使用し受け手の認識状況を確認した後、言語学習者が言及法に対する言語知識・語用論知識について質問することも観察される。トライマーカーの使用を通して、言語学習者にリアルタイムに反応する時間を与え、言及法の言語使用の知識を取り上げることが可能になると考えられる。

## 7. 今後の課題

本稿は、異文化間コミュニケーションの1種であるタンデム学習の日本語会話を研究のデータとし、この場面におけるトライマーカーの使用、及び言語学習者と言語学習の協力者によるトライマーカーの使用の違いについて分析、考察した。タンデム学習において、トライマーカーの使用を通して受け手の認識状況を確認することで、受け手の認識状況に合わせて自身の語りを構築することができる他、自身の言及法に関する言語知識に対する不確実さ

を表し、受け手に言語知識に関して確認要求することができる。トライマーカーの使用で言語学習への志向を示し、日常会話を交わしていても言語学習の機会を創り出すことができる。

森（2004）が指摘しているように、会話分析の手法を通して第二言語習得の結果を分析することには限界がある。しかし、会話参加者がいかにすでに獲得した言語能力を生かし、会話に参加するののかについてはまだ研究の余地がある。今後はその点について分析を続けたいと考えている。また、タンデム学習について教育学の研究が展開されているが、ミクロな視点で会話の組織について分析し、会話参加者の相互行為について研究する余地があると考えている。そして、本稿は会話参加者がいかにポーズや視線・体の向きなどを利用して相手とやりとりしているのかについてまだ分析が至っていない部分があり、今後はこれらの要素も分析に入れたいと考えている。

#### [会話例の文字化規則]

表記	意味	表記	意味
(0.4)	0.4秒の間合い	(.)	0.2秒以下のポーズ
:	音の伸ばし（一つで0.1秒を示す）	=	発話の音がなくつながっている
><	発話の速度が速い部分	<>	発話の速度が遅い部分
。。	音が小さい部分	<u>下線</u>	強調されている部分
?	上昇イントネーション	¿	「？」ほど上昇していないが多少上昇している部分
-	発話が途切れている部分	[]	発話が重なる部分
h	笑い	¥¥	笑いながら発話された部分
.h	吸気音	**	中国語で話している部分
↑	直後の音が突然上がる	↓	直後の音が突然下がる
(( ))	筆者による注釈	(文字)	はっきり聞き取れないが、文字通りに聞こえる部分

## [注]

- 1) トライマーカーの使用回数はペア②のチェンが3回、ペア②のりかが6回、ペア③のテサが11回、ペア③の松本が2回である。
- 2) 「引き込む」とは、時系列に沿って構築されていくTCUにおいて、話し手はその過程で様々な原因により、受け手が参加できる相互行為のための空間を作り上げることである。「あらかじめ相手の認識を確保し、同一態度(alignment)、共感(affiliation)、あるいはスタンス(stance)を、相互に確認しつつ発話単位を産出する一つの方法」(岩崎, 2008, p.203)でもある。
- 3) 「え?」、「ん?」で返答する場合は、受け手が単に話を聞き取れなかったが聞き取れれば知っているという可能性がある。その場合、会話の続きにおいて、話し手が自己修復を開始する、あるいは言葉を説明し始める事例を、受け手の認識的ステータスが(K-)であるものと判断する。また、トライマーカーに対して受け手が沈黙する場合、受け手の認識的ステータスが(K+)と(K-)のどちらであるかも、話し手の言語行動を判断の基準とする。話し手が本題連鎖に戻る場合は、受け手の認識的ステータスを(K+)としてとらえる。一方、話し手が言及された事物について説明し始めたり、事例2【近松門左衛門】のように自身の言及の行動に対してマイナスの評価をしたりする場合は、受け手の認識的ステータスを(K-)としてとらえる。

## [参考文献]

- 岩崎志真子(2008)「会話における発話単位の協調的構築—「引き込み」現象からみる発話単位の多面性と聞き手性再考—」申田秀也・定延利之・伝康晴(編)『「単位」としての文と発話』ひつじ書房：pp.169-220.
- 許挺傑(2012)「会話分析を通してのコミュニケーション・ストラテジーの再考察：上昇イントネーションによる確認要求のストラテジーを例に」『筑波応用言語学研究』19：pp.87-101.
- 申田秀也(2008)「指示者が開始する認識探索—認識と進行性のやりくり—」『社会言語科学』10(2)：pp.96-108.
- H. サックス、E. A. シェグロフ、G. ジェファソン著(2010)『会話分析基本論集』、西阪訳、世界思想社.
- 高本智世・細田由利・森田笑(2016)『会話分析の基礎』ひつじ書房.
- 森純子(2004)「第二言語習得研究における会話分析：Conversation Analysis(CA)の基本原則、可能性、限界の考察」『第二言語としての日本語の習得研究』7：pp.186-213.

- Hayashi, M. (2005) Referential problems and turn construction: An exploration of an intersection between grammar and interaction, *Text*, 25 (4), 437-468.
- Heritage, J. (1984) A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atkinson and J. Heritage (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis*, 299-345. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heritage, J. (2007) Intersubjectivity and progressivity in person and place reference. In N. J. Enfield and Tanya Stivers (Eds.), *Person Reference in Interaction: Linguistic, Cultural and Social Perspectives*, 255-280. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heritage, J. (2012a) Epistemics in action: Action formation and territories of knowledge. *Research on Language and Social Interaction*, 45 (1), 1-29.
- Heritage, J. (2012b) The epistemic engine: Sequence organization and territories of knowledge. *Research on Language and Social Interaction*, 45 (1), 30-52.
- Little, D. & Brammerts, H. (Eds.) (1996) *A guide to language learning in tandem via the internet*. CLCS Occasional Paper, no. 46. Dublin: Trinity College, Center for Language and Communication Studies. Retrieved from <http://eric.ed.gov/?id=ED399789>
- Mondada, L. (2013) Displaying, contesting and negotiating epistemic authority in social interaction: Descriptions and questions in guided visits. *Discourse Studies*, 15 (5), 597-626.
- Sacks, H. (1992) *Lectures on Conversation*. In Jefferson, G. (ed.). Oxford: Blackwell.
- Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn taking for conversation. *Language*, 50 (4), 696-735.
- Sacks, H. & Schegloff, E. A. (1979) Two preferences in the organization of reference to persons in conversation and their interaction. In G. Psathas (ed.) *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, pp. 15-21. New York: Irvington.
- Schegloff, E. A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977) Preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language* 53, 361-382.

(大学院博士後期課程学生)

## SUMMARY

Try-markers in Intercultural Communication:  
A Specific Usage in Tandem Learning Conversations

Zhenyan CAI

Referring to people, places, things, and so on is a common practice in daily conversations, but it does not always succeed, as the recipient may not recognize what has been referred to. To deal with this potential communicative problem, speakers have been observed using REFERENT + rising intonation as a try-marker (Sacks & Schegloff, 1979) to check the recipient's knowledge about the referent.

This article explores how try-markers are deployed in tandem learning conversations, a kind of intercultural communication, and how tandem learning participants display their orientation towards second language learning by using try-markers when they are ostensibly not sure about the linguistic knowledge of the recipient. This article argues that participants use try-markers not only to check recipients' epistemic status about the referent, but also to show their epistemic status about the linguistic knowledge of the referent and invite their partner to confirm, explain, or correct the try-marked item. In doing so, it is argued that the participants can create opportunities to expand their linguistic knowledge, and changing their identities as a native speaker or a non-native speaker in a dynamic way.